實に是れ法學通論の効用と知らずや

三　法學通論は普通教育の一科目として必要なること

イエリング曰く、權利の觀念なきものは地上に匍匐する昆虫と何の撰ぶ所なしと、思ふに野蠻未開の人民は權利の觀念に乏しく、文明開化の國民は之が思想に富み饒みたり、實ま權利觀念の厚薄は、以て社會の文野如何を卜するに足るが故ま、苟も文化の光明に接せんと欲するものは、須く權利觀念の發達進歩を務めざるべからず、殊に改訂條約の施行せられ、この觀念の最も發達せりと稱せらるゝ歐米諸國の民族と、雜居比肩して相交るの今日、社會の事紛糾錯綜に之れ加ふるの時に於て、我が國民たるものは、速に舊時の迷想を破り、大に權利の觀念を養ひ、以て彼等ま當るの準備を爲さずんば、品行性格動もすれば彼等の足下に蹂躙せられ、所謂地上匍匐の悲境に沈淪することなきを保し難きまあらずや、飜て思ふに權利は法律の主觀にして法律は權利の客觀なり、法律の社會に於けるや、猶影の像に添ふが如く、人の法律に於けるや、猶魚の水に在るが如し、人は法律に生活し、法律ま動作し、法律に成立すとは、寔ま千古不滅の格言なり。且つ夫れ民をして據らしむべし、知らしむ可らずてふ主義は、既に封建時代の夢と化し去り、現代開化の社會に於ては。法律の不知を以て、其適用を免ることを得ずてふ法制上の主義とするに至りたれば、凡そ國民たるものは皆國法を暗知するものと見做さるゝが故に、法律の觀念の養成の必要、今日よりも急なるは無かるべきなり、果して然らば、之が思想を養成し、之が觀念を發達せしむる方法は如何、他なし常識を養ふにあり、而して法律思想を缺き、權利觀念に乏しき國民は、未だ以て常識ある國民と認むることを得ず、之れ法學通論は普通教育の一科として必要缺く可らざる所以也。

文苑

◎漢文

◎老谷遺稿序

特別會員　服部愛軒

老谷木原先生之長於埼玉師範學校也。導生徒以道德。不敢加鞭撻。生徒皆服其德。勤勉匪懈。制行嚴正。學業日進。父兄皆曰。先生薫陶之力也。嗚呼先生德足以化俗。才足以安民。而不能有一所施。止區々一縣教官。余安得不爲先生悲乎。先生爲人清廉寡欲。尤重名節。眼光烱々。鬚眉皓白。如神仙中人。其與物接。不設畛域。即之藹然有和氣。人愛而畏之。嘗入史館。將有所大用。不幸以病辭職。晩赴埼玉。不復論天下事。公務之餘。以烟霞爲娛。縣有調宮公園。老樹森欝。隔絶人寰。先生愛其幽邃。時與章輩會於此。置酒論文。醉則清談佳謔。如不知富貴功名爲何物也。初余之來東京貧甚。殆不能自活。將西歸。一夕有客來過。問之則先生也。曰。昨於某家觀子文。聞今將歸。是下喬木入幽谷者。吾儕旦暮入地。繼起者非子輩而誰。何不來我埼玉。余感激遂從之。屈指十有六年矣。先生墓樹已拱。而余髮亦種種。曾無一辭足以傳世者。使先生有知。其謂之何。頃者。嗣子守三將刻遺稿。囑中村伯實校次。余亦與焉。蓋先生之文。理以爲主。氣以行之。絢爛而蒼潤。不求工而自工。蓋德之與才如此。其發於詞藻者。亦安得不然乎。重野成齋博士嘗評先生之文曰。試入遜思齋集中不可辨也。岡鹿門翁亦曰。當求諸古人集中。今人無此作。二公天下文宗。而其推服至此。何須余輩稱賛。

唯知遇之感。則有不能已者。遂爲之序。明治乙未春三月。

◎漢詩

◎古中元日、小林枕水氏樂々園招飲、次韵答賦、時北清騷擾、王師出征、而勝報荐臻、錄一

市瀨雨山

戰雲漠々漲乾坤。四百餘州烽火繁。風露滿天人坐月。清光不照北京門。

◎樂々園

杉浦鴨渚　孝本

湖光一碧入蕭條。蘆荻花飛秋水遙。全盛當年思樂々。冷煙微日古欄橋。

◎雪

九霄玉龍戰。萬里白漫々。漢戍明沙漠。胡雲度雪山。雁哀南渚黑。隼疾北林寒。落日知何處。唯看獵騎還。

◎春雨孤寂忽憶都門故人

江樓何所見。春雨細霏々。青草烟樵徑。紅花垂釣磯。地幽鷄犬響。天遠雁魚稀。千里知音在。望雲魂自飛。

◎東台春遊二首

東台山上花如錦。東台山下人似雲。白雪漫天香欲墜。晴烟連地綠難分。龍宮繡縵翻朝霓。苔廟金扉閃夕曛。

盡日遊春歡未盡。明晨更看亂紅紛。

憶昔將軍起沛豐。飛揚四海壓群雄。可憐項羽霸西楚。遂使漢高歌大風。八萬貔貅從一劍。十餘孫子擁元戎。

祇今東照廟前過。寂寞花殘斜日中。

◎墨江賞花　三首

今永英足

春風一夜滿江城。十里櫻花照水明。不要桃源遠尋去。吾妻橋北是仙瀛。

江水江花明錦雲。江樓江樹隱斜曛。趁流蘭槳翻歌扇。一管春風兩岸聞。

萬片花飛春水流。一江斜日使人愁。白鷗自在隨波去。借問落紅何處留。

◎雪中兎狩の記

明治二十九年三月吾妻山のかたに狩せむとて、米澤中學與讓館職員生徒一同朝まだきより出立つ。馬喰町、七軒町を經て御壇開道、糠平といふに出づ。こゝは、目もおよばぬ廣野なるに、道も畠も、雪に埋みてさなから海原に白浪の繁く立てるが如く、往きかふ橇は舟を引くが如し。柴引のしば〻憩へるも炭引の速ま過ぎ行くも見るごとにをかし。

雪は皆浪にまがひてをちこちの橇のゆきゝは舟と見えつゝ

打つれて橇引くさまのさま〻に雪おもしろき置賜が原

こゝより見わ渡る山々は右に羽山といふあり。いかなる鳥のおとしけむとおもふもをかし。なでら山、あたご山、湯澤、柳澤、高寺山など、築地を築きたらむやうにぞ見ゆる。操返山は、何の經文を、くり返しけむといといぶかし、此所は、名だたる不動尊ありと聞けばそを祈りしにや。舟坂山も何のゆかりの名ならむと、きかまほし。向ひに見ゆるは、押並べて吾妻嶽とぞ聞くなるに、人妻も登らむとれもふもをかし。兜山、頂のみ現れたるに、白星と見わたる雪、いみじうをかし、左に栗子山見ゆ、かの隧道の闇さなど、おもひ浮ぶるは、いと〻〻つらし、村は遠山村といふを、近く見つゝ、古志田村のかくるゝを、あたらしと望みて行くに、笹の町といふに出づ。こゝは、けづり花の名所と聞けば彼の二條家にて三木の傳と、ことぐしうのゝ

じりあへる、めとのけづり花も、この類にはあらざるかと切に見まほしけれど、あたはぬぞに口惜しき。それより猪苗代、横堀、石垣町などを見つゝ行くに、白旗の松原といふ見ゆ。

降積める雪の朝けに見渡せば一むら黑し白旗の森

など口すさみて山神といふ處にいたる、こゝにて体操の教官は、生徒一同に向ひて狩の心得べき事を告ぐ。各藁履に、かんじきといふものをつく、雪にぬからざらむがためなり。さて、糠山といふを西北南の三面より圍みて追ふ。勢子は各二間計宛を隔てゝ静々と聲をかけて進む。二三町とおぼしき所に到れば、かなたの峰より白浪の打越來るにやと見るほどに、これぞ彼の白兎にはありける、雪深き國の兎は冬は皆、白くなるものなりと、かねて聞き置きしに、今又白きを見つれば、取り集めて眞白よ見ゆ。その外、右にも左よも出たりゝといふ聲す。暫しありて網の方よ、関の聲聞ゆ。すはや兎のかゝりたるなんめりと、足を空に、馳せ往きて見れば、あやまたず、さきの白浪と見しが、二頭羅りたる、初山の初獲なれば皆々喜ぶ事限なく、此いきほひにて、今五六頭狩まくれといふ聲の中よ雉の飛び出てたる羽音よまた一入の勇氣そひて、今は峰をも谷をも蹈崩すべき、いきほひとはなりぬ。程なく二の山の網の用意整ひたれば、勢子は例の人垣を造りて、一整に攻め登る。半程よ至れば右の方よ狐々と呼ぶ聲す。何をいふにかと思へるに、その狐あわて、ふためきたる狀に後を幾度も見かへりつゝ、網の方に馳せゆくは、嬉しくも、うしろめたし。羅れりといふ聲今もや、すらむと、耳傾けつゝ網際迄進みゆけど、何の物音もなし。さきの狐は網を飛び越えて、かなたの谷へ逃げたるなりけり。こたびの口惜しさに、さきの興は、聊か、さめたれど、重て追はむ勇氣は、へるべうも見えず。打つぎ〳〵四度追ひてまた三頭の兎を得つ。いつれも皆白色にして走れば浪の立てるが如くぞ見えし。因幡の白兎といふ神世がたりも、さぞありけむとおもふも、幼びたり。

浪ならぬ兎を浪といかで見つ浪を兎と見るはありとも

折しも、めづらかなる木の根の、龍の躍るに似たるが、ありければ、そを取らむとする内に、勢子は、のこらずかなたざまへ、遠ざかりゆきて聲も聞えずなりぬ、われは初めて分け入りし山路なれば、さらぬだに迷り克なるを、雪さへ降積みて道も方角もえ知らねば、いつくへ行かむも、おぼつかなし、一筋の足跡あるを、とめつゝ行くに、末はさま〳〵に分れて樵などの引きけちたるよ、心細く行めば鳥の聲、谷水の音なぞ幽にきこゆ。

今はたゞたどる道さへきえ果てゝ鳥の鳴く音に谷水の音

やよ〳〵と聲の限りよ、よばへど、山彦の外には答ふる人もなし。今は手足の向きたる方へと樵の跡をしるべに行きたるに、樵引きたるをのこ、むかひより、こなたざまに來たるは、嬉しとも嬉しくて、斯るものぞもは見ざりしかと問ふに、彼の山蔭に會ひきといふ、これこそ翅を得たれと、鳥にまがひて飛び行けば、丹南といふ所にて、追ひ付きぬ。皆々も今迄捜したり、いづくに居たりしかと口々に問ふも答しげし、そこにて一同火なぞ焚きて暫しいきつき午後二時頃歸さにつきぬ、わが熊本あたりにも兎を狩るわざは年々盛よ物すれど雪中の白兎はいまだ狩りし事なかりしものを

おもひきや筑紫の海のあまの子があづま狩子よまじらはむとは

◎修學旅行

五　日

澤村專太郎、田中藤馬、伊藤利三郎、廣瀨勘治郎、廣瀨助一郎、合筆

鳥聲鳴々、曉の夢醒むれば孤屬静かなり、戸を排して天の一方を望めば曉星點々、四顧模糊たり、時は維れ明治庚子十一月五日、我が校修學旅行發程の日なり、晴か、雨か、冥霧深くしてこれを辨じ難し、さもあら

ばあれ、吾人は天候に左右せらるゝものにあらず、雨降らば降れ、風吹かば吹け、四百有餘の健兒は斃れて後止まんのみ、偶〻天は吾人の壯擧をや賛しけん、將た、吾人の意氣をや愛せられけん、曉風一過、白霧を吹き散じて青空一片の浮雲なし、快なる哉、

午前七時三十分、劉喨たる喇叭の聲は金龜城下に起りぬ、一調は高く、一調は低し、既にして肅々校門を出づる隊列は即ち我が校の健兒が旅の門出なり、見よ、戎裝整然として鐵脚濶歩し、劍戟相摩して鏘然、校旗朝風に飜々たるの如何に壯快なるかを。

仰ぎて城山を望めば千年の老松翠緑を滴らして名殘を惜、むが如く俯して城濠を瞰むれば細波萬斛の笑を湛へて此行を送るが如し、午前八時五十五分彦根發の列車に搭せんと欲して停車場に至る、既にして之に乘じて瀛笛一聲北方に馳走す、車窓に倚りて左顧右眄すれば、採藻の小舟波上に泛び、廻繞起伏波浪の捲くが如き連山は悉く双眸に映じ來る、瀛車は湖と山との間を馳りつゝやがて米原に着しぬ、これより北陸線に乘りかへて再び進行す、田畝の中に餘念なく鍬をとれる農夫、畑地に麥の種を蒔ける女、さては河岸に笹舟を浮べて破顔一笑する小兒、野邊に草花を摘みて欽々乎たる少女、來去應接ゝ遑なし、既にして長濱に至る、時に午前九時四十九分、乃ち下車して本願寺別院に憩ふ、此の時我校長閣下修學旅行中に於ける注意を諭さる、長濱を後にして本隊は再び北方に行進を起こせり。長濱を距ること北方里餘、一大河流の蜿蜒として遙ゝ東方の山麓より奔れるあり、白沙高低遠く連り、丈餘の蘆葦両岸ゝ叢生せり、一橋あり、名けて大井橋と云ふ、會々蘆花中に聲あり、愕然として凝視すれば、一童小鳥を拉して走り出づ、依りて之に問ふに河名を以てす、曰く、姉川なりと。嗚呼これ姉川なるか、元龜元年夫の德川家康と淺井。淺倉等と戰ひし古戰場は實に是なりけり、想ふに伏屍累々積んで山を成し鮮血淋漓河水を染めたる當年の遺趾今はた奈何にかある、その昔勇鬪激戰せし勇士が一掬の清水に渴を醫せんとせし所はそも何處ぞ、叱咤勵聲萬卒を指揮せし猛士の枯骨今那邊にかある、想ふて是ゝ至れば水音蟲聲人をして轉々感慨に堪ゑざらしむ、嗚呼かの膽嶺は愁雲を鎖して千古の恨を宿すが如く、姉水滔々長へゝ万夫の悲慘を語るが如し、

橋を渡りて行くこと數十町、五村なる本願寺別院に到る、晝餐を了へ午後一時頃此處を辭して猶北方へ續進す、夫の淺井長政が壘壁を築き、幾万の大軍を一喝したる小谷山は巍然として青空に聳ゑたり、茲に我校の健兒は幾百年前、幾多の猛將勇夫が魚鱗鶴翼の陣營を張り、從横馳突して出沒離合の機宜を權りし此古戰場ゝ於て、一快戰を試み以て當年の壯觀を今日ゝ現出せんとす、烟塵漠々砲聲轟々吾人は今や戰鬪場の武夫となれり、

隊列は二個大隊に區別せられたり、既にして各中隊は何處ともなく別れ去れり、時に二時四十五分なりき、各隊間として聲なく、杳として隻影を見ず、驟雨沛然として到らんとする時は天却て靜なり、寂たる此光景は今や將に轟々漠々、万雷一時に落下するが如き光景を現はさんとせり、見よ、此處彼處に戎服の人影草間ゝ出沒しつゝあるを、両軍の斥候は業に已に各敵營の搜索ゝ餘念なし、嗚呼快なる哉、

此演習に關する南北兩軍の想定は、敦賀灣に上陸したる北軍は京都に侵入せんとする目的を以て、已に其先頭は木之本村に在り、之れを姉川附近に於て邀擊せんとする南軍の一部隊は、長濱に到着したるものに擬す、我生徒隊の演習は即ち北軍の左側衞なる一個中隊と、南軍の戰鬪斥候たる一個中隊との衝突せしものにして、午後三時南軍の斥候中隊は警戒行軍の法により、五村を發し道を三川西野に取り、其小斥候の阿部村南端に達するや、郡上東北端の高丘に敵の歩兵凡そ二ヶ小隊の陣地を占領せるを認知し、之れを後方に報告せり、茲に於て南軍中隊長は其中隊を伊部村北方の畑地に散開し、射擊を開始し北軍之れに應射し、銃聲轟々山嶽

に反響し耳を聾せんとす、南軍一進一止、遂ゐ北軍の陣地に突擊せんとするや、北軍は郡上村東方の高地ゐ退却せり、南軍は更に進路を轉じ、北國脇往還ゐ出で追擊射擊をなす、北軍之れに應射し、將に激烈の戰を見んとす、偶々休戰の喇叭は響き亘り戰鬪是に於て局を結びぬ。時に午後三時二十分なりき。

本隊は再び集合し小憩の後此處を發して木の本に向ふ、進むこと數拾町、妹川あり、妹川橋を架す、蓋し姉川に對してこれを名づけしものならんか。愈々進みて愈々行けば小谷山は既ゐ暮色につゝまれて茫漠、妹川の水聲はいよゝ微なり、求時の鳥巷頭の柳枝になくの頃、木の本に入る、本日行程約九里。

本町にて全校生徒、數部に分れて宿泊す。

因に云ふ、本日午後七時より十時迄自由散歩を許されたり、

六　日

起床喇叭の聲に驚かされてはね起きたるは五時半なりき倉皇準備を整へて地藏堂前に整列し直に賤ヶ嶽へと出發なしぬ

曉霧は僅に霽れて遠山の數峯は恥かしげに其鮮紅の色を顯はしつ、橡尾山の支脈は道の右側を占めて麓の數中には何鳥にやあらん朝風に囀づる聲のいと長閑げなり、橡尾山は柳ヶ瀨の西に連りて柴田氏の臣毛受勝介兄弟の戰死したる處なりとか、其墓は行市山下にあり、漸時ゐして大岩山に至るべき木標のある處より我等は左に折れて小徑を辿りぬ、沿道に茅屋二三あり其破れかゝりたる垣根のあたりは落葉堆かく積りて取り殘されたる柿の木に累々たる紅珠の人待ちげなるもおかし、露を含みたる野生の白菊月蕊霜葩、高潔なる風米采は古武士の凛乎たる面影を見るか如くこれ又あはれなる心地せらる、敦賀行の二番列車の朦々たる烟を殘して過ぎ去りたる後は沈默なる我等修學旅行の一隊が蜿々として行くのみ世界は寂莫たる風景に包まれて唯鐵路を越ゑたる處一條の清流潺湲として琴筑を彈するが如く聊か我等の旅情を慰むるに似たり、我等は直に山路へ進みしが灌莽おひ茂りて露は早くもズボンを透し剩へ汗は玉の如く顏ゐ滴りて苦しさ言はん方なし、顧みれば朝霧は猶四方の山々をとざして冥濛山水を辨せず、辛ふじて中川清秀の墓に着きぬ、天正十一年癸未四月二十日淨光院殿行譽莊岳大居士神儀と記されたる墳墓の側には中川清之助外數名の碑あり、是は天正十一年四月柴田勝家の將佐久間盛政賤ヶ嶽を攻めし時守將中川清秀の戰死したる處ゐして歷史上有名なる古蹟なり、其側に久德主人の墓碑銘あり、文章整然として能く死者の眞面目を寫し得たり、之を讀みて我等は感慨禁ずる能はず、天を仰ひでは其八荒を睥睨したる勇者の正に武名隆々たりし天正の昔を追想し伏しては九地を藐視して彼が功名の如何に偉大なりしかを思ひ低回去るに忍びず、墓は廻らすに柵を以てしたれど灌莽繁茂して風打雨淋荒頽甚だしきは豈嘆ずべきの事ならずや、こはもと山中にありて之を吊ふ人の來るなく茲に至りしものならんか我等は世の志士に對して其注意を促がさんとするものなり、

此處より更に進みて賤ヶ嶽に登れば、余吾湖は山の北麓に當りて深碧一泓鏡の如くほがら〳〵と照る朝日に映じて湖岸此處彼處に散点せる茅屋と杉小立を倒に撮したる樣ゐもいはれず、加之ならず萬山の紅葉錦繡の如く紅碧両つながら双眸に迫り來りて快極りなし、余吾湖は周回一里鮒を產す此水流れて柳ヶ瀨川と合し余吾川となり遂に琶湖に注ぐ、

山頂には龍手田安定君碑文を撰定し文部次官杉孫一郎氏篆額したる碑あり、此山の有名なるは殊更に呶々するの必要なければ玆に言はず、山の東に當りて琶湖は洋々として鏡の如くたゝへたり、瞰下するに斷崖幾千仞水は山麓を廻りて漁舟は水面を滑りつゝあり、九時半此處を出發しまたもや荆棘を排しつゝ麓なる飯野浦に下りつ、飯野浦よりは鹽津に至るべき道二あり、一は山越ゐして地獄坂と云ふ非常なる險坂にて所謂前者

殆ど後者の蓋を蹈むの觀あり、他を地獄阪に對して沙婆廼りと云ふ湖岸を傳ひて山麓を廻るなり、我等は此道を取り汀を歩せしが時ありては稜角劍の如き巖石道を遮り或は磊砢たる大石の頭上に落ちんとするありて其奇名狀すべからず、東方に當りて竹生島かもめの浮ぶが如く見ゆ、此あたりは琵湖中最も廣き處にして眼界宏濶水天髣髴としてさゞれ波の上をゆるく漕ぎ行く白帆の影又は何處より何處に行きけん聲のみしたる水禽の囀りなど何れも我等が腦漿を刺戟して何となく哀れげなり、鹽津は遙かにみゐたれども、足は疲れに疲れたれば思ふがまゝに歩まれず唯氣のみいらだちてもどかしさ言はんかたなし、されども翼なき我等は湖上を飛び行く事をも得せざれば猶此犖确たる砂石を蹈んで曲折幾十般行くこと一里餘にして漸く鹽津に着きぬ、靜光寺。といふに晝飯せり、握飯に梅干の食事も饑は窮士に美味を與へしといふ事をも思ひあはされておかし、曩に木の本より菅山寺へ登ゝたる一隊の歸るを待つ、菅山寺は菅公の學問せられたる處なりとか云ひ傳ふ賤ヶ嶽の東方山中にあり、鹽津は湖北の良灣にして敦賀に通する要路に當り滋船は常に大津に往來せり、往年我等は此寺にて一泊したる事あれば何となく懷かしき心地したり、一時餘にして再び隊伍を整へ出發せり、此處あり永原村の大浦までは二里とか聞きし、敦賀鹽津間の新道を進みて岩熊村より左折すれば阪路なり、此邊は開けたる田塍にして稻は既に刈りつくされハサと稱する一丈餘りの竹にて作りたるものに掛けられたり、岩熊阪を越ゑて田圃の小徑を辿りつゝ大浦に着きたるは實に五時三十分なりし、大浦は五十戸ばかりの小村にて山間の避地なれば未だ軍隊などの來りたる事もなく亦中學教育を受けつゝある人の如きも頗る少なしと云ふ、我校の此旅行につきて宿泊を依頼したるより全村民一致して大に歡迎せられたり、我等の宿泊したるは二十有餘家にて其饗應の厚き親切懇篤至らざるなし、我等は旅行の疲勞をも忘れ村民諸君の厚情を感謝したり、此處も前に琵湖を抱き後は峨々たる山岳につゝまれ所謂山紫水明の地なり、夜に入れば皎々たる月光爛々たる星河、萬里の碧天秋正に高く糢糊たる暮靄は湖上の遠方を閉したり、我等は饗應の丁寧なると風景の絶佳なるとに滿足し校友皆喜色滿面ゝ溢れたり、嗚呼此月夜微吟逍遙して靜に天地の美妙に感じつゝ一轉故郷人の上を追想すれば感概こもぐ〳〵喟集し來り轉た斷腸に堪へず、歸りて衾をかつげども輾轉の極眠る能はず、うつ〳〵として喇叭の聲に驚かされ起き出でたる時は早や旭日障子を射通しつゝありき、

七　日

八時十五分出發、湖岸に沿いて行く事昨日の如く山麓の水涯を辿りて巖石を蹈み砂泥を蹴立てゝ進む一里餘にして饅頭ヶ岳の險阪にかゝりぬ、徑路僅に一線薜羅を擧ぢて登るに萬山の紅葉漸く落ち盡さて路將に埋沒せんとす、顧みれば大浦は山に遮れて見る能はず、西江洲の山々は指呼の間にあり、辛ふじて汀上に下れば其處に大巖あり松梅二樹其罅裂を貫ひて生せるまた一奇觀と云ふべし、此近傍の眺望も流石に湖濱なればにや人目を喜ばすもの少なからず、山麓に三ヶ所石灰製造場あり皆岩穴の内ゑて之を燒けり、村の入口にて海津小學校生徒の歡迎を受け其校内にて晝飯す此處の優待も亦我等を滿足せしめたり、此地は大津間と滋船の往來あり近來は商業も繁盛にて戸數は三百ばかり職業は商農漁を以て三分せられたり、午後一時出發此處より今津までは平垣にて道の両側ゑは田圃開けたり、其右側なる丘陵よりは花崗石を取り出せるを見たり、蛭口川知内橋を渡りて西庄村字蛭口を過ぐ此あたりは土地瘦せて土砂多く殆ど川原の如し畑には桑茶烟草等の外他の植物を見ず澤村と云ふに休憩したるは二時三十分なり、川上村、深清水、福岡、弘川、の諸村を過ぎ五時今津ゑ着す、此時校長は既に有志者の爲ゑ農産陳列所に於て、教育談話會開會中なりき、一同警察署前に整列し校長よりの訓示を受け各々宿泊せり、今津は高島郡の主府にして滋船の便あり、商業も繁盛にし市街をなせり、此日は恰も十五夜ゑ當れば月色湖上に映じて金波灩瀲竹生島は夢の如く幻の如く暮靄の上に浮

べり、校友は三々五々棧橋に集り月光を浴びつゝ汀上に立ちて微吟談笑旅情なきものゝ如し、やがて歸りて寢に就きしが漁舟の艫聲枕邊に響きて其幽邃なる形容すべからず。

八　日

起床六時、膽峰雲晴れて琵琶の湖は眞に鏡の如し。

劉亮たる喇叭と共に今津を辞せしは、約八時頃なりき、此日勝野迄行程四里半。

町を離れて十有五町を進めば、右手に當りて一邱の隆然として遠く起り南に延長せるを見る、これぞ我國有數の高臺よして其名を饗庭野と云ひ、今は陸軍省の直轄に屬す。

此邊は別に稱すべき景色も無く、平凡無趣味なれども、初見參の吾々には彼の行手に横ぼり伏せる秋の山も、織る人のなき紅錦と思はれ、葉末に結べる露の滴も、腐敗詩人の涙ともおもほへて、又幾分の興なきにしもあらず。

兎角する中よ安曇川にかゝりぬ。安曇川は湖西第一の大川よして、其源を滋賀郡に發し阿彌陀が岳を迂回して東流湖に注ぐ。此川床は、乾河原にて舟をやるべき水だに無けれど、大雨沛然としていたれば忽氾濫して大害を農民に加ふる、西江洲難物の一と聞けり。

川を越へて遙よ南方を眺むるに靄は一躰に小村を掠め、枯木立に鳥の群れる、農夫の破笠を頭にしたるなどの、洒落たる景色は眞に一幅の好畫圖と云ふべきなり。

吾一行は十一時に青柳村に着きぬ、小川村の大字なり、其名は忽ち近江聖人を聯想せしめぬ。

一行、先づ藤樹先生の菩提寺なる玉林寺に小憩し、直ちに書院に到りぬ。

さすが、此地は聖人の昔ながらの處とて、土地の風俗も質素順扑よ見ゆて、おとなしく此濁世の弊風にもたずさはらぬは、世に有難き遺風にこそ。

書院の敷地の前には、貴顯紳士よりの書院新築寄附金の目錄、宛然板屏の如し之にて先生の遺德の程も知らるゝなり、其中には滋賀縣第一中學校、職員生徒云々の目錄も雜りて見ゆたり。

書院の敷地は約十五間位にて、少し南方によりて、假の書院嚴然として建てり、蓋此土地ぞ先生御生前の住宅の跡にて、彼の蕃山翁の三日三夜頑として去らざりしも此の處なり。

扨て吾等は一同敬禮を院前に行ひ、後書院の中を殘る猥なく拜見せり。其中主なるものは、

跡麗はしき致良知をものせる掛物、及和歌數首、

大塩平八郎先生の致良知に對する跋、

孝經一卷、

其他孔子十哲の像、及び先生の像等、

殊よなつかしきは、先生の御召物數領よて、手前織の袖少さく、小倉袴の破れかちなるなど何れも質素なるは、いとゞ昔ぞ、忍ばるゝ、

吾々一行は、御遺物を拜見し了つて後、玉林寺にて湯茶の世話になり晝飯を喫せり。

玉林寺の門前にまがき廻らす三の卒塔婆立てり、是れぞ先生と母堂及夫人のなきから埋むるしるしの塚にて、半ば苔に蝕せり。

此小川村のほとりは、世よ高島硯の產地なれば、行通不便なるにも拘はらず、行商人の出入少なからずと云ふ。

午後二時と云ふよ小川村を辞して、南の方に進行し勝野よ着きしは四時頃なりき。

今日の旅舍は二個の寺院にて本部は鳥屋といふ旅宿なりき。

此村は、分部氏の舊城市にて、湖西第一の大邑なり、棧橋の架設もあり、又町もかなりに整ひて、一見般富の土地と思はる。

好天氣の日などには、沖の島は手に取る樣よ見ゆると聞きしが、我々の散歩を始めしときは、黄昏の時なりしため、暮靄に遮られしは、殘念至極と云ふべし。

九　日

朝風颯々扉を敲き、寺鐘隱々耳朶に徹しぬ、秋の夜の肌寒く、故山の夢を結び兼ねたる羈客大半、重からぬ衾を蹴て起き、やがて吹く喇叭の音も、今は唯ねぼけ先生を驚かすに過ぎざりき、例の折辨當を喫し、了れば再び集合喇叭の音は響きぬ、執銃中隊、徒手中隊、何れも両寺の境内に整列し、午前六時に勝野の里を出でぬ、此日も朝霞深く湖山の間を罩めたれば、鞭聲肅々の句自から胸に浮びて、そゞろに謙信河中嶋の出陣かくやと想はれたり、一行は對岸の荒神山を遠く波間に眺めて、西近江路を南行す、第一中隊、第二中隊は互に送迎顧望して進軍せり、名高き白鬚の明神は、實に山水相迫るの域にあり、松杉枝を交へ、社殿神さび て奥ゆかし、その昔一片の盥舟にゆられ、逆卷く大波のまに〳〵、湖東より參詣せしと聞きつるが、今は勝野に寄航する小蒸氣船の便あれば、賽客常に絶ゑずと云ふ、天涯遙かに雲の間に望みたる東江州の地も、歩々近きて呼ばゝ應に答へんとす、我鄕果して何れの邊にかある、日高く青空に懸り、波光灔瀲鮮魚潑溂たる志賀の浦の景色を眺めつゝ、進み行けば身は恰も羽化登仙するの思あり、風聲瑟々たる小松村の濱には、十數の漁民打集ひて、小謠うたひながら網引するあり、一同茲に休憩して暫時見物するに、長さ四五十間の大網は尺一尺と操り上げられ、見る〳〵日和魚堆かきまで多く岸に跳れるを、村童競ふて籠に入る、想ふに彼の漁民が今宵樂しき團欒の晩餐は、迚も王侯が食前方丈の珍味も若かざる者あらん、漁村の生活亦快ならずや、

一行は件の犬＝今津より伴ひ來りたる赤犬を先達とし、軍歌の聲高く木戸村よ入り、さて樹下神社の木の下陰に行厨を開く、斯くて正午再び出發す、比良の峯高く秋天を凌ぎ、身にしむ嵐颯として枯野の木々を吹拂へり、此邊一帶の地勢は峻巒疊々西に聳ゑ、漣波漾々岸を打ち、頗る平地に乏し、田毎の月を賞する蓋し好地位ならん、試みよ輿地圖を披きて滋賀郡の湖岸線を見るに、屈曲出入甚だ多く其形蠶の足の如し、是れ其勝景の夥しき、他郡に冠たる所以なり、一行は和邇川を渉り、空林古木の間を過ぎて左に折れ、午後三時過ぐる比、竟に堅田の郊外よ達しぬ、行程七里と云ふ、

徒手中隊は執銃中隊に後るゝ數時、茲に一行隊伍を整へ、喇叭の音高く堅田の町に入りぬ、病氣其他の事故を以て、今朝共に出發する能はざりし十數人は、正午發の滊船にて勝野を出帆せしが、是れ亦同時に堅田に着きぬ、宿舍數軒、本部及余等本部附十二名は、五年級生一同と波止場前の伊勢屋に投ず、この地に勾當内侍の廟ありて程遠からねば、旅裝を解かずして杖を曳きたる健兒十數人ありき、余亦其一人なり、近江八景の一として世にもてはやされたる、堅田の浮御堂も、端なく先年の洪水に破壞せしかば、其後新材を交へて再建したるものは、即ち今の堂塔にして、風韻の見るべきなく、雅致の賞すべきなし、折惡しく落雁は見ざりしも、店頭の菓子屋には夥多見うけたり、こは此地唯一の名產なり、夕食了りて午後九時まで自由散歩を許さる、秋月皎々として湖上金波を漂はす、夜更けて比叡嵐肌に徹す、旅窓の下よ、快談盡きて徒然なるの時、同郡出身一年級生萬木寛三君實家より、さわし柿數個つゝを惠送せられたり。

旭日將に湖面に昇らんとす、即ち床を蹴て起く時午前六時なり、此日は歸校の日なり意氣數倍旅宿を出發す、行くこと里餘にして一橋を渡る衣川といふ其れより寂寞たる原野に出つ又一二の寒村を經て九時三十分漸くにして上坂本村ゑ達す、此地に有名なる日吉神社あり乃ち一同列を社前に解き各自に參拜す、行くこと一町道右に神猿を見る、尙登ること一町遂に本社に達す其建築構造見るへき者あり、社右に廿七八年征淸の役ゑ獲る所の戰利品あり、社前より比叡山の登路あり、一橋其の谷間に懸る下を眺むれば大石は自然に階段をなし水は山腹より落下して汾沫衣を濕し夏尙は寒さを感せしむ、水聲喧囂談話を辨せず、其絶景人をして快と呼ばしむ、已にして時來り五年級生のみ道を比叡山に取る餘は別に隊伍を編成し午前十一時此地を出發し鬱々たる松原をへて唐崎に着す、有名なる老松千古色を變せず其高さ三丈餘樹幹の周圍五尋條枝四邊に擴がり欝葱として晝尙ほ暗し、近時條枝蜒大するに從ひ木を以て之を支へ以て風雪に備ふ、樹下に一小祠あり所謂唐崎神社是なり、衆皆樹陰に箕居晝飯を喫す、前面は一帶の湖水渺々たり而して瀉船漁舟往來繁く東岸三上山の遠望又奇觀なり、已に休むこと三十分午後一時出發し大津に向ふ、其間有名なる志賀の舊跡あり廣袤約二里余曾て禁闕のありし所なり土人之れを呼んで御所内と云ふ、其紀念碑は錦織村ゑあり、一同參拜して去る、已にして行くこと數町遙に見ゆるは大津市にして高樓烟突所々に見ゆ、嗚呼連日歷遊する所皆山間僻地茲に漸く黑烟の中空に昇るを見瀉笛の遠く響くを聞く心中自ら快活なり、漸くにして近けば右ゑは大津營戍あり左には同練兵場あり、其より進み遂に三井寺ゑ達す、一同茲に解列す此地の古物は辨慶の汁鍋及び鐘山頂には征淸紀念碑、同戰利品たる靑龍刀あり、一同を巡覽し終りし時は午後二時二十五分なり、已にして一同集合山を下り市を通りて縣廳裏に至る、茲に於て本縣々視學官矢板寛氏より我々に左の訓示あり

余諸子が既に西北地方を旅行し今や將に歸校せられんとするに當り一言以て所感を宣ふ、熟々世界の大勢を見るゑ体格最强なるは英人なり、智識の高尙なるは獨人なり、而して意匠巧妙なるは佛人なり、不幸ゑも我國人は此ゑ屈指さるゝ能はずそれ我國人の外人に比し体格柔弱にして智能も亦未熟なる所以なり、第二の國民たる諸子之を挽回せんとするに當り單に學務に吸々たるのみならず時に困苦欠乏に堪ゆるの修學旅行を以て最可とす、諸子奮て三長をして我國に歸せしめられんことを望む。

右終りて一同相揖し出でゝ馬場驛に行く、時正に五時發車前、日已に西山に殁し暮色蒼然三井の晩鐘隱々として響く、乃人員を檢査して五時廿分の列車に投じ午後七時無事歸校す、一同体操場に集合し校長より訓示あり終りて君ヶ代三唱して解散す。（完）

◎八淵紀行

第五年級　鈴木嘉藏

かねて聞き及ぶ、八淵は、わが住家より、程遠からぬに、未だ一たびも、ものせぬ事の、うらむづかしく、折あらば遊ばんと思ひ居たりしが、事ゑ紛れて得ものせざりしを今年八月の二十日あゑり九日友だち七八人同じ心ゑ契りあひ曉深く家を出づ、抑この八淵はわが里の近傍にて流るゝ名も鴨川と稱ふ京都の加茂川の水にもをさをさ劣らぬ淸き流の源にてこゝより西の方二里餘りと聞きつ、家を出でしは午前四時過ぎならん、東明の空ほの〴〵と明け行くに、朝霧いと深く、四方の山々を蔽ひ、さながらきぬ着けたる如く、村里より立ち昇る、炊烟は恰も低く下りたる、雲かと、疑はれ動きもやらぬは、正しく今日の閑かなるを示していと目出たし、鴨水に沿ひて行く事半里にして高島村に至る、なほ半里が程に、同じ村の字は中溝に入る、此の里のはづれに、さゝやかなる祠あり、つゆ蛇といふ、古よりこの方年毎ゑ、梅雨の候に至れば、長さ二三尺の白蛇出でけるを、里の者あやしみて神の化身なりとし、かく祟め祀りしとか、又或る者は幸福を得ん爲

めとかと語り合ひき、此より一里が程ゑして黒谷に至る、此道なほ鴨川に沿ひ、東一方を除き他の三方は山にして、仰けば巍々たる峰巒の、聳ゆるありて、或は奇巖怪石よりなるあり、或は欝蒼たる喬木よりなるあり、或は赭山なるあり、俯して觀れば清々たる鴨水の流るゝありて、或は急に、或るは緩やかに、或は岩石に碎けて、泡沫となるなど、其けしきの妙なること得も云はれず、そが上に山上より吹き下す微風は、徐ろゑ衣襟を拂ひて、その爽快形容すべからず、身はうつ蟬のも拔の殼いつしか心も氣も身を拔けて吾にもあらで見とるゝをりしも、目の前に薪を負ひたる、大の黒牛のあるに打ち驚かされて、皆々道傍に飛び退さぬ、

世の中のうしをいとひてこしものぞ心してひけつなとりをのこ

やがて黒谷に着き、案内者の許に至りぬ、時に七時ずきなり、一時あまり憩ひて、九時に至りまた出立ちぬ、こゝより三十町の程と聞きつるに、初めの程はさして、險しき道ゑもあらざりしが、漸く進むに從ひ、益險しく、或は草木の茂りて、道を埋め、或は欝蒼として、晝なほ暗き、樹陰をすぎ、或は羊腸の所など、幾所ともなく經て、彼方を見れば、一際目立ちて、皆岩にてなれる山あり、是こそ八淵のある所なれ、とあないの、君の云はるゝまゝ、先つ程より、弱りに弱りし、身も心もにはかに勢付きて、流るゝ汗を拭ひもあへず、進み行く程に、すさまじくもがう〳〵と鳴り響く、水の音に、もはや、八淵の近きにあること知られて、いとたのもし、右手ゑ見下して、いと大なる岩あり、その下より、泡立つ、水の湧き出づるが如きは、其有樣を名とせる、洞拔（ウトヌク）岩なり、行く事僅にして、左手にいと清き湍流あり、不思議や此あたりは、麝香のにほひ鼻をつき來たる、あないの君の言はるゝやう此水は俗に麝香水と稱へて、或は此水の通路に麝香草とかいふものゝあるによるならんと、實にさこそと思はれたり、

暫く進めば、やがて上つ方より、四番目の淵なる大すりばちに至る、こは其の形の磨鉢ゑ似たるより、かう

樣に名づけしとか、おしなへて、八つの淵は、大なる岩に瀧つ落つる水の爲めかく淵とはなれるにて、實に幾千年を經たりけん、水の力ぞ恐しき、その水いと清し、この山さして、高くあらねど、あたりは、いたく冷にして、暫し此邊りにあれば、寒さを覺ゑ、上る時瀧つ瀨と流れし汗も、忽ちかわきて、重ね衣したき程ゑなりぬ、以て此水の清冽なるを知りぬべし、

おつたきつ雪かとまがふ水の色は雪にもましてつめたかりけり

傍へゑ、四枚敷とも思しき、岩あり、此岩其初め、傍なる山上にありけるを、或人此淵のま中へ落せしが、不思議や、一夜が内に、今の所に浮き上れりとなん、一行は、此岩に腰かけ、暫しやすらふ内、或る人の、泳ぎせんといふに、已れも其處に衣ぬぎて、水浴びたるに、切るが如き冷たさに、暫しの間も得たへで、うち上りぬ、此邊りのけしき、いとみやびやかにして、木も石もいたく物ふりて、わざとならぬけしき、一きは身にしみて興深し、こゝより上はいとも險しとの言に、各々がさゝやかなる荷物も、此岩上に托して身輕に出で立つ、

その上なるは、小すりばちとて、前より、さゝやかなれど、其さまさらに、きよげにして、其名に似たり深さ四丈ときゝつれど、其の水の清きに、いと淺く見ゆ、そのけしき前に劣らず、是より、愈、けはしき道を、木の根、岩の角、なぞゑすがりて、行く、漸くにして、屏風が淵に至る、そのさま、さながら、屏風を立てしたるがく如、その趣わきて興深し、

名ゑし負ふ屏風が淵の岩かどにさかまく水の畫に似たるかな

なほも進む程に、遂に七遍回しに至る、これなん、最も上なる淵にして、その間に、永瀨と名づくる淵あれど、いぬる年、地變の爲めに、大方は破壞せしとかにて、今は唯そが、名殘を留むるのみ、

世の中は常にもがもな永瀬ぶちありし昔のさまも知らまし

そも此七遍回しと名づけしは、そのかみ、或る人の誤つて、おのが、かむれる菅がさを落せしが、七度翻りて、流れ落ちしより、斯く稱せしとなん、その水、四五丈の高きより、落つるものから、あたりは水烟いと深し、暫したゝずむ程に、衣のいたく濕ひて、いと寒さを覺ねぬ、あはれ、此水の一層高からば、いと目出たき瀧にこそあらめと、思はれたり、折から輝きたる日光の、此水烟をてらして、我等がまはりに虹を現して、ねも云はれぬ景色となりぬ、取りわきて、落口の面白きに、更に一層の趣を添へ、氣も心もいつか吾が身を離れ、雲の上にあるかと疑はれぬ、

是より下りて元の大すりばちに歸り、岩上に置きし荷物を携へ、なほも下りて第五のからとが淵に至る、こゝにて、ある岩に腰うちかけ、携へ來りし御酒を呑む、すべてこゝに遊ぶ者は、御酒を上つると聞きつれば、我等もかくまねびしなり、

千早ふる神代のさまも忍ばれてゆかしさまさるからとぶちかな

その下に見ゆるは、障子ヶ淵とて、其の形恰も、障子を閉せる如し、両脇には、太やかなる樹木の、いと茂りて、更に日光の透らねば、物凄き事限りなし、

こゝを辞して、最も下なる魚止めに至る、實ゝ其の名の如くけはしく、瀧上るてふ鯉も、いかでか、上り越ゆべき、

瀧上る鯉もいかでか上り得む聞きしにましてけはしかりけり

是にて八つの淵を見終りぬ、その有樣各趣を異にし、甚と興深く、そのけしきの妙なること、いかで、我等が拙なき筆にて盡さるべき、唯おほよそに、其の道筋を記しゝのみ、とまれかくまれ、人に見すべき文ならねど、あはれ雅情深き諸君よ、拙なき文をば深くも咎め給はずして、夏季の休暇をもて避暑がてらにおとなはれよ、あるは思ひの半ばに過ぐるものあらむか、

かくて我等は、歸途に就きぬ、慣れぬ山路に、いたく勞れしまゝ、此度は、少しく安らかなる道を取りて、午の頃黒谷に着きぬ、さて八淵に至る道二筋あり、上りの時は險しくて、近きものを取りしなり、先きに忘れしまゝ、此に補ふ、是より我等はあないの君の懇なる勸めによりて、そが家に至りぬ、晝飯を終へ、暫時休らふ内、はや先きの勞れの出でゝか、いぐ地なくも夢地をたどるもあり、或は碁を圍みて白黒を鬪はすもあり、おのれ寢られぬまゝに、椽側ゟ立ちより、はれやかなる野づら、青々と生ひ茂れる山々など、いと興多きに、たゞまなく吹き來る風ゟ、其愉快さ限りなきを感じて、いとゞ山家の夏を羨みぬ、

漸く午後四時ゟ至り、裝を調へて此所を出で立ち、黄昏の頃、無事におのが家にかへりぬ、

一度はと思ひの雲も今日はれて清きけしきを見て歸るかな

◎越路の旅

第四年級　廣瀬勘次郎

日本海岸一帶の地、層嶂重巒嵯峨として聳ゑ、怒濤狂瀾膨湃として到る、奇景絶勝の域、古來英雄の起りし所、兵馬の馳驅せし所、吾人宜しく訪ふべき地なり、時方に盛夏、北清多事の際、征夫異境に血を流すの秋、勃然として情激し、氣昂り、書齋籠城の鬱ゟ堪へず、乃ち單身孤劍を杖き、草鞋輕ろく里閭を出で、鐵脚の下、偏ねく此山水を跋渉し、以て此遺跡を吊はんとす、壯なる哉此舉、快なる哉此行、多趣多感腦裡に横溢するも、愧らくは余が禿筆を如何せん、今は唯見聞の一班を叙して、本誌の餘白を汚さんと欲するなり、

山又山

（七月廿九日、敦賀より武生に至る）

濤聲端なく殘夢を破れば、金烏已ょ東天に翔り、窓竹さやかに影を映しぬ、蓐を蹴て清流に嗽き、出でゝ海濱に嘯き、汐風に梳り、敦賀港を辞して武生に向ふ、水烟模糊の中ょ一丘あり、是れなん南朝の遺跡金ヶ崎城趾なり、史上の事は、國民たるもの皆能く知る所、今更に云はずもがな、無情の荒草、無心の白露、瞳に映ずるものは、皆是れ悲觀哀蹟にして、一として涙の種ならざるなし、岬頭金ヶ崎神社に詣づ、即ち春宮恒良、一宮尊良二親王を祀れる所、殿舍莊嚴犯すべからず、恭しく祠前に拜伏稽首すれば、松風颯々として胸裡に迫り、感慨更に切なるを覺ゆ、嗟吁天なる哉、時なる哉、昨は九天高く紫雲の上にまし〳〵しも、今は北海の荒磯、孤城の下、あはれ果なく自刃せさせ玉ふ、奸賊尊氏彼れ何爲るものぞ、上は龍種を惱し奉り、下は忠臣烈士を屠る、罪惡天地ょ容れざる所、魂魄尙存するあらば、奚んぞ來て英靈の下に万謝せざる、咄々奸賊尊氏やと、俯仰低回去る能はず、少焉ありて、時辰巳でに八時を報じぬ、乃ち驚きて先路に就けり、風波飄蕩の險を冒し、山岳起伏の間を曲折迂回し、或は暗々たる洞窟を潛ぐり、或は漠々たる原野を過ぎ、里許にして再び海岸に出づ。

遙かに海上を眺むれば、遠山漂渺として敦賀灣を扼し、立石崎の一角、僅かに外海と相通ず、實に北門の鎖鑰なり、ょして東亜の天、風雲轉た急なる今日に於てをや、知らず日本海上砲彈響き、硝烟暗憺たるそも何の日ぞ、憂ふる勿れ、我れに日本魂あり、我れに日本刀あり、縱令艨艟海を蔽ひ、貔貅百萬を以てするも、一擧して元虜の覆轍を蹈ましめんのみ、洋々たる大瀛の水は、神洲元氣の鐘る所、何爲れぞ外夷の辱を被る如きことあらんやと、自ら勇氣を鼓舞しつゝ、右に逶迤たる翠巒を負ひ、左に漫々たる碧水を控へ、長汀曲浦に沿ひて行く、嶋巖高崖一として奇景ならざるなし、忽ち一大巖の横るあり、遠きより之れを望めば猛虎の如く、近づき見れば蟠龍に似たり、綠松倒生して鬚髯の如く、懸水墜ちて吼ゆるが如し、脚下は即ち百仞の斷崖にして、巉岩怪石恰も犬羊の如く、蒼波白浪碎けて珠を噴く、奇觀云ふべからず、惜い哉地僻陬に屬し、世人未だ此勝區を知らず、余をして韓抑の筆を挾み、歐蘇の藻才あらしめば、庶幾くば一篇能く天下の人士を驚動するに足らん歟、拙劣無能の文、奚んぞ眞景の万一を描くを得んや、茲に於て帶ぶる所の行厨を開く、食味常時に勝れり、旅塵を拂て漫吟自適し、殆んど長途の勞を忘る、愈行けば愈奇なり、武陵桃源此を距る遠きにあらざるが如し、余曾て聞く、火山激流のある所奇景多しと、抑も越州の地勢たる、白岳高く乾位に聳ゑ、親潮流れて岸を洗ふ、これ蓋し能く此鬼斧神工を爲す所以ならん、歩々斷岸漸く險ょ、荆棘路を埋む、眸を廻せば日本海上渺々漫々滄溟万里、覺ゑず、雲耶山耶を歌はしむ、水天相接する所、瀛船の黑烟を吐くを望みては、北京攻城の砲烟かと訝られ、翠黛一髮水に浮べる能州の山影を眺めては、恍惚として不識庵が望鄕の詩篇を想はしむ、竟に右折して山中に入る、老鶯落花を夢み、牧馬水草に嘶けり、連山疊々絶て人烟なし。

時正に午時、炎帝赫灼として頭上を射、一蓋の編笠防ぐに由なく、七寸の破鞋歩むに力なし、熱天焦地の間、氣息喘々流汗絞るが如し、乃ち避けて綠陰に憩ふ、涓々たる細流僅かに渴を醫すべし、乍ち掬ひ、乍ち飲む、水源涸れて喉飽かず、實にや食前の斗酒も、卓上の美味も、今此一掬の水に如かざる也、傳へ聞く、養老山中孝子の汲みし瀧水は、化して醇酒となりしとぞ、今此水の味亦佳なり、寧ろ甘泉と謂ふべきか、時に一人の樵夫、大木を擔ひて過ぐるょ遇ふ、蓬髮氈々面貌鐵の如し、因て問ふ武生までの行程幾何ぞと、彼れ唯默々たり、之れを强ゆると再三、竟に言はずして去る、嗚呼彼れ果して何等の痴啞ぞや、既にして一童後ろより來るあり、紅顏豊頰乃父ょ似ず、乃ち温言を以て之れょ問ふ、曰く猶六里に餘れりと、余初め敦賀を發し

奇景妙域の間、謂らく已ょ數里の外にあり、武生に至る必ずや呼應の内にあらんかと、然るょ今此言を聞く、前途を想望して茫然自失、恰も夢の如し、日漸く傾き前途猶遠し、今は一刻も躊躇すべからず、即ちく字形の杖笻を以て疲足を扶け、口語呶々して急ぐ、折しも清風颯として衣を拂ひ、樹陰天光を蔽ひて涼し、四顧寥々唯溪水の潺湲たるを聞くのみ、吁此無人境今余果して奇遇にかゐる、沈思すれば憂愁鬱々、放吟は漸く默嘯となり、急足は漸く緩歩となり、一佇一進一行一憩の間、夕陽全く沒し、晩雅塒を求めて去れり、嗚呼山中獨旅の斷腸、誰れか其の辛苦を知れるものぞ、昏黃の空は刻々夜色を裝ひ、星光灼々たる比、遙かに鷄犬の聲を聞けり、茲に於てか始めて人里に達せしを喜び、暗中ょ雀躍して山を下れば、數点の燈火樹間に隱見せり、あゝこれ實に武生町なりき、乃ち疾足急奔旅軒に投ずれば、店頭の柱時計正に八時を報じぬ。

◎詩仙堂を訪ふ

第三年級　澤村專太郎

明治庚子の夏、一笠一簑、飄颻として西都に遊ぶ、然れとも、紅塵万丈の地に徘徊するを欲せず、一意、幽を討ね、奇を搜ぐるにあり、時は維れ、八月二十有一日、遇々比叡山に登らんと欲し、黎明、草鞋竹杖、飄然として寓舍を後にし、白露を蹈みて行く、加茂川に沿ひ北行すること數十町、既にして、東方に轉ず、前途二路に分岐す、趣ち左す、徑は漸く隘く、愈々進めは益々隘し、曲々回々、既にして一沼の葦中に終る、是に於てか、余は道を失したるを悟り、撫然佇立し、茫然として爲す所を知らず、而して四顧寂莫人影を見ず、比叡の山角は峰巒環遶の間ょ峙ち、白雲時に之をつゝみて朦朧、其影を隱沒し、時に細雨を齎し來る、眼前に招くが如き秀峰ょ接し、而かも行く能はず、意爲めょ帳々たり、左右徘徊する頃刻にして一條の坦途を得たり、迚り行くこと十數町、一村落に達す、一老あり、乃ち辞を低うして尋ぬるに登山の道を以てす、彼れ蹙眉空を見あげつゝ曰く、日已に高し、登るべからずと、余意平かならず、更ょ問ふに近傍の故蹟を以てす、曰く、金福寺、曰く、詩仙堂、と、乃ち登山は之れを他日に讓り、詩仙堂に向つて行く、一乘寺村に入り細流を溯る一千歩、一紫門の北方に向つて立つあり、小有洞と扁す、之れ詩仙堂なり、一揖して入る、左右翠竹繁茂し、清風瑟々其間を亘り、俗懷天外に飛び、神澄み、氣爽かなり、入ること十數歩、又門あり、命じて梅關と云ふ、進んで玄關に訪ふ、雛尼聲に應じて來り迎ふ、乃ち余を書院に導く。

抑も詩仙堂は石川丈山翁の故居にして、夫の慶長中、浪華の役、翁、東照公に從ひ、群を拔きて、先登首級を得しと雖、その擧たる、法ょ違ふの故を以て祿を奪はる、倏忽身影を沒し、塵埃の地を蹈まず、地を京北にトし、盧を結んで此ょ居る、文人雅客と交はりて文筆の往來日に繁く、羅山、杏庵と親み善し、嘗て靈元上皇の召見を辞し、和歌一首を奉る、曰く、

わたらじな、せみの小川の淺くとも、老の波立つ影ぞはづかし、

と、著はす所、覆醬集、北山紀文等あり。

爾來數百年、文人墨客、足を京師に容るれば、趣ち、行きて、其の居を吊ふ、余生平、翁の名を聞く、而して其故居を訪はざるを以て至憾となせり、豈ょ計らんや、今日遇然訪ふことを得んとは。

既にして尼僧、六々十萬人社各衆姓名牒を出す、乃ち姓名を記す、三十有六の畫像ありて楣間に掲ぐ、或は座し、或は跪し、或は筆紙を手にす、而して其上に各詩一首を題す、是れ晉より宋に至る詩人の像なり、畫は探幽の筆、字は翁の手に成る、室は方十尺に滿たずと雖、清潔塵を止めず、藏する所の書卷は曰く、賢達和詩、曰く、拾介抄、曰く、詩仙堂誌、曰く覆醬集、曰く、詩歌千首、曰く、贏奎律隨、曰く、後漢書、其他數十百卷、又、先生自作の料紙硯、ふ雪硯、世壽硯、等を藏す、去つて、一室に引かる、扇に唐獅子の調

刻物あり、左甚五郎の作なりと、又六勿の銘あり。

勿妄丙王。　勿忘棍賊。
勿斁晨輿。　勿嫌糲食。
勿變儉勤。　勿隋拂拭。

仰いで天井を見れば、蛟龍叢雲に駕するの畫あり、雛尼說いて曰く、是れ先生八十歳の筆なりと、噫々翁が邁往豪宕の氣、蓋し、此猛蛇の如く、稜々宇宙を壓し、沛然驟雨の至るを待ち、天に登らんとするものありしならんか、漫漶鮮ならずと雖、而も、隱々として瀟灑卓然たるの畫風は翁の人爲を想見せしむるゑ足る、短刃あり、錦繡を以て之をつゝむ、翁の護刀なりと、階を上る數段、一麋鹿の伏するあり、愕然退歩、而して之を熟視すれば、之れ一個の木像なり、思ふゑ翁平素、麋を愛せりと聞く、故に晩年是を摸し、愛藏せしものならんか、更に登ること両三段、段全く盡く、楣間に嘯月樓と扁す、尼、竹如意、及び椶毛竹柄の拂子を出す、共に翁の作なりと、又机を出す、狀樹根を以て作りたるが如し、命じて天造と云ふ、室は廣さ、五疊に滿たず、乃ち小欄により眸を放つて、遠望近眺すれば、豁然たる平野、蜒蜒たる繙嶽、方に恍惚として神飛ぶの感あり、是に於てか、翁が自ら之れにより、百戰百勝の策、千變万化の畧を胸中に算し、莞然此山野を眄睨し、長嘯一番奮然として、既往を想起し、覺ゑず、塵尾を振はれしを想ふに及び快然腕鳴り、神躍る、既にして洛陽東山の午砲に驚かされ、倉皇下りて客室に憩ふ、庭園に松、梅の二樹あり、鬱蒼として茂る、翁の手植に係ると、清泉あり、紋波を織りて尺大の赤魚潑喇として躍り、嬋娟たる西明山は絶ゑず涼風を送る、頓て尼に謝して出で、低徊顧望、既にし歸り、燈影の下禿筆を叱して此記を草す。時ゑ空澄み、月白し、鴨川の清流は長へに翁が高潔を語るが如く、滾々として遠く往き月影を漾はす。

◎夏の一夜

第三年級　澤村專太郎

まことやかねをもとらかすとからうたにも見ゑつる如ぎひるまの暑さなほさりやらねば、團扇片手にとりてわが家を出でぬ、かやり火のけむりにむせびて蚊ともろ共ゑ家を逐はれてか、あらはなる寢まきすがたのまゝ、門邊の破れ床凡にこし打ちかけ、涼風をいれつゝ、あるは浮世ばなしに餘念なく、あるは人の噂に他愛なし、小兒等のかなたゑ螢を見出し、かれこそわれのものなれ、否とよ、われこそかれを見出しつれなど爭ひながらかけより、人のもてるなるに互に打ち興じて笑ひさゞめくも罪なしや、かくて余は小兒等の一むれに立ち雜り、蛇の如き野路に分け入りて、草の葉末のしら露に宿る月かげふみしだき、なほも歩をうつしぬ、さるほどにかすかに水聲の玉琴を奏でつる如きひゞきと、水車のめぐる音忙はしげゑ聞ゑ來れり、見亘せばおぼろながら山々の遠く連りて麓の邊ゑ伏屋めく家の二つ三つばかり見ゑつ隱れつ、さながら筆もて畫きたらむがやうなり、やせ馬逐ひもて行くは馬子の歸りを急ぐなるべく、人こゑの喧しきは小兒等の螢からむとてなるべし、とかうしつるまに一道の小川の前ゑきたりぬ。

蛙の濁聲ゑなくもをかしく、水面を吹く涼風のうすきゆかたの袖にはらみてゑもいはれぬ心地ぞなむ、水は清く水晶のやうに透りて小石にさゝやきつゝ流れ、しがらみの上に螢の一つ二つとまりて、青色の光、水に落ち、さながら玉屑を沈めたらむがやうに、また、清き月影の水の面にうつれるに、柳の糸、うちなびきてからうもりの二つ三つ四つとびかふなど涼しとも涼し、丸木ばしを打渡り、とある木かぶに腰打おろし、靜かにからうたなんど吟みける程に、何處よりか、風のまゑ〳〵妙なる笛の音朗らかに響きわたりいやましに涼しかり、あはれ涼しくもすめる今宵かなと、不覺にくちずさみせし折しも、歸りおくれし郭公の一聲にうな

がされて我家を指して歸りきぬ。

◎茸狩

第三年級　松井太四郎

今日は友どちと茸狩せんと約したる日なり最早や夜明に間も有るまじと、睡むたき眼に妻戸おしあけ日和如何と打眺むるに、一とむらの雲だになければ喜ぶ事限りなし、東の空眉ひきたるほど明るきは、旭の昇る峯ならんか、星の光未だ全く消ゑやらで、彼方此方よ輝き、有明の月西山の峯なる松に落ちんとして、初厂の三つ四つ二つ飛び行くが、一聲高く月に殘して山のあなたへ隱れたり、そよ〳〵と軒のあたりを吹く風は、いたく身にしみぬ、朝顏の枯れたるまゝ、まづわれる枯竹の尖に、赤蟷螂のねむれるはいと興あり、面洗ひ朝けしたゝめ、色々の用意畢り、友待つ程なく門の戸をおとなひしは同行を約せし友なりき。

いざと柴門を出で行くに、野路の狹きが上に、田の畔に豆いと茂りて、道を蔽ひ、露いとふかし、伴れし犬を先に追立て、ゆく、夜明けのほゞは天地皆しづまりて、山寺の明方の鐘、松吹く風に響きていと幽かに、物淋し、朝霧ふかく山々谷々を埋めて、あるは遠く、あるは近く、或は深く或は淺く見ゆるさへをかし、顧れば我里の、朝けの烟いと豊かにて、風もなければ、立ち去りもせで、木々の梢に棚びけるに、鎭守の杉の木立より、明鴉の三つ四つ立ち出でゆく樣、ゐもいはれぬ景色なり。

成熟せる稻の皆苅りとられて、はさよ桂られ、黄金色なる、稻穗のそよ〳〵吹き渡る風に、いと重げに、ふさ〳〵と動くは豊年の徵見ゑていと樂し、只田の面には、案山子の笠破れ骨顯はれ、倒れんばかりなるは、いみじう哀れなりけり。

田畝の小川を、二つ三つ越へ十五六町ゆけば、さして來る山の麓に着きぬ。程なく朝日の東の山の端より、離れたり、遠近の山は皆紅葉して、うすく、こく、千草の葉末だ白露を結び、今しも昇りし太陽の光を斜に受け、相映じて、星の如く、玉の如く、黄金の如く、光りたるは、之もいはぬ風景なり。一ときは面白さは荒れ果てし向ひの畑に、芋の葉に露おびて、さら〳〵〳〵と光りつゝ、そよ吹風に、こぼれ轉びつ、さてはひときは强き風ふけば、哀れや一とまろびに碎けて落ちぬるなど、いと趣あり、草むらに、すだく虫、何を思ひて、なきぬらん、いと哀れなり、犬は少しも息はんともせで、彼方此方をとぶ虫に、心取られて此方へ走り、彼方にとびしはいとおかしかりき。彼方の畑には柿の實の、六つ七つ、赤みたるが見ゆ。

やがて友促して、是より山の小路を辿り、松や樫やを押しわけ、數十間登れば松山となりぬ、われ先よ穗物せんと爭ひ登るに、似よりたるものさへあらねば、尙も力を勵ましてゆく、此の處は小松原となりぬ、五六歩入りし處に苔の露ふかき其中に、うらどろのいたく哀れに枯れがちにて、中程より折れ居たり、其下を、すかし見るに、こはいかに、五六本の蕾茸いと勢よげに、並び生ひ居たるを見、喜ぶ事限りなく友呼びとめて互に探り、籠よ收め尙もわたりを探し求むるよ、三間四間を隔てゝ今開かんとするあり、中ば開きたるもあり、喜びに堪へず、しばしなかむる程に犬はかくとも知らず、くるひまわりて蹈み碎きしは、いと惜しかりき。斯くて頂に至る頃籠に半ば滿ちたりき。

あまりの喜びに、峻しき山も苦しともせず來りしが、此處に至れば、足俄に痛みを覺ゑぬ。暫し息はんと、景よき場所を選みつ、日は我れ等が背を暖に射て、なつはせの熟したるが、ふさ〳〵としてありければ、之を取りて渴を醫したりき、西は一面湖にのぞみ、おちちこちの山の霧全く消ゑ、幽かに彼の岸の伏屋めきたる家さへ見ゑぬ。波のおだやかなるに、眞帆片帆の小島がくれにゆく。よせ來りては打ち返す小波よ、浮きつ沈みつ見ゑ隱れよ、たゞよふ水鳥の十余り、いと樂しげなるに、舟歌うたひつゝ漕き行く漁夫の、舟に驚

かされて忽ち沈みしが、五六間離れて、浮きつる樣いと長閑にて墨畫にもゑがかまほしき心ちせらる、ふりさけ見れば田の面には農夫の聲高らかゐ笑ふさへのどかに聞ゆ。

山の麓を賤の女が、小さきかごを腰に着け或は脊に荷ひ互に手を携へ、細きこゑにて、愛らしく「君が世は千代に八千代に」などゝ歌ひつゝ行くこゑさへ、聞ゆるは、大かた栗ひろいならん。影は見ねど男兒らしきが、「矢玉は霰」、などゝ活潑に勇ましく歌ふ聲は、いつしか山の奥へとゆきぬ。

嗚呼あり難や治まれる御代、賤が屋の少女も今は惠みのつゆに濕ひぬ。いにし昔を思ひ出せば余は祖父上のひざにありて、我等が幼き時吾が祖先の世は一夜として枕を高く睡る事さへ出來ず、青草も、血にまみれ吹き來る風もなまぐさく、親は子を呼び子は親ゐ別れしなど、戰國時代の話を聞きし時ありしが、思へば今は有りがたき御代なるかな、昔しのばれて、ぞゝろ涙にむせびぬ。

未だ晝に間もあれば、今少し穫物せんと、又もや松林を上りつ下りつ、くゞり行く程に、梢のあたり風ふきて、四十雀の聲いと樂しげゐ聞ゆ茸の多くありしにはあらねど、一本取り二本三本と探る間にいつとなく空腹となりければ、前の處に立ち戻り、落葉枯木など搔き集め火を焚きて彼の茸を炙りたるに香氣ゐもいはれず、各辨當取いだし、犬ゐも別ちやりなどして四隣の風景眺めつゝ賞味せし其時のたのしさ今尙ほしのばれてなん

◎我愛らしき友

第三年級　河村喜一郎

夜あけのそら、いとうらゝかに、晴れ渡りたれば、とくより起き出でゝ、例の釣竿片手に携へて我家をいでぬ、道すがら見渡すかぎりうすぐらく、ただ草の葉末は露の玉を貫きていと面白く、東山の松の梢のあたり白みはじめて、あり明の月の光いとほそく西に傾きて、いと涼しげなり、歩をすゝむるにつけて、東の空も、やう〳〵あかるく、遠方をながむれば、青みわたりたる空に、伊吹山のわれはがほに、大空にそびゆるもいとをかし、はるかあなたなる伏屋めきたる茅ふきの一つ家、苔むしたる屋根、破れがちなる窓より細き烟のきほひのぼるは人住む家なめり、日の出までゐ、鳰の湖邊に至りつかむと思へば、そなたざまにいそぐほどに、やがて湖邊につきぬ、水うみのけしきなにとなく涼しく、心地よし、暫ありて例のかがしらの針を投ぐれば、暫しのほどに多くの魚を釣つれば、籠に入れ、野草をかりてその上にもりつ、やがて釣をやめて緑陰白砂のなめらかなるところに、蹲りてやすらふ、折しも一人のをのこの菅のかさきて、魚とらんとにや竿を擔ひ、淡靄のうちに見ゑつかくれつして終には笠のみあらはるゝもをかしかりき、やがて家路に就きつるに蟬の聲いと淸く、すゞし、きりぎりすの聲のかたへの叢の中にしげるをさゝながら、いでとらへんと、もとむるほどに、こぼれ種の朝かほならんいとうつくしうさきて、さながら我をまちたらんが如し、かくてかのきりぎりすを捉へて芹川の堤まそひて、さかのぼるに、淸き水の面をはらふ川風ふきゝたり涼しともすゞしかりき、家に歸りてかのきりぎりすをかごの中に入れぬ、今よりは籠ゐかはれて文机の友とはなされけり、その後は文机にむかひて、文ゐむたびにかの虫さびしき聲ふるはせて、讀書のつたなきを哂ふやうなればふと心付きてことさらにつとめてよめば、こたびはかの虫いとうるはしき音をたてゝ、賞するが如くなり、實に此の虫すらもつたなきをばわらひ、たくみなるを、愛つるぞ愛らしき故に予は讀書のともとして、ます〳〵いつくしみぬ、

◎荒野の月

第三年級　廣瀨文豪

朝まだきより降りつゞきし雨は、やうやうゐやみにけれど、名殘の雲は未だ散りやらず、今宵十五夜の滿月も、得見る可くもあらざれば、一人いぶせき床に打伏して、うつらうつらと眠りけり、折りしも吾名を呼ぶ者あるに驚きて、夢を半ばに目ざませは、愛らしや吾か弟の、あふるゝ笑みを湛へつゝ、兄上よ、あだし雲は散り去りて、清けき月は出でたるよ、とく起きませ、と聲もあわたゞしげに促すを、打うなづきて、さらば共にものせんと、やれにし柴折戸推開き、野中の道ゐ出で見れば、花より清き滿月は、山の端高くさし昇り、云はん方なく面白し、かゝる目出たき月影を、粟津の野邊に見たらんには、さぞや哀れを覺ゆらんなど語り合ひ、手に手を取りて進みけり、月の名所と云ふにあらざれば、見にこん人は絶へてなく、あたり荒れたる草の野の、主も住まはぬあばらやゐ、さらに厭へるけしきなく、照る月影の其樣は、譬ふる者なく哀れなり、少し歩みを進めて小川のあたりに來て見れば、岸を蔽へる草の葉に、置き渡したる白露は、玉の如くにきらめきて、其下流るゝ清水は、さゝかにうつる影洗ひ、一入床しさましけり、折しも誰れのすさびゐや、いとも妙なる笛の音の、木立を漏れて聞ゑ來ぬ、或は高く又低く、月なる神もそを聞きて、降り舞ふらん此の野邊に、草葉の下に鳴く虫も、已れのこわねを羞ぢけるか、はたとばかりに靜りぬ、かゝる荒野に月見るは、已ればかりと思ひしに、さては同じ心の人もあるものか、そゞろ慕はしく思はれて、森の方にと問ひ行けば、千々に交る木の枝に、月の光もさゝぬなり、耳をすまして立ち聞けば、今は如何にや笛の音は、さらに聞ゑずなりはてゝ、虫の聲のみかまびすし、あなあやしきことにかなと、森を立ち出でゝ、月のさまを窺へば、白き滿月は西の空に傾きて、折しも聞ゆる鐘一つ、

◎無名川の一夕

第三年級　廣瀬文豪

日は已に西山の端ゐかたむき、をちこちの蛙の音も哀れに聞ゑ、四方の山々も又淡煙の爲めに蔽れぬ、折しも讀書も倦みにしかば、某川に散策試みんものと、柴折戸推開きたゞり行きぬ、川岸に立ちて四方を眺むれば、丘も、森も、野も、原も、一面に靄の中ゐ沒し、只某川のみ白く、紐の如く、黑き野を縫ひ廻れり、前岸の柳は河霧に包まれて、そよ吹く風に靡き、其面白さ云はん方なし、歩みを進めて、とある小石に腰かけながら、此の景色を眺むれば、遙の森蔭より、風に送られて笛の音の、とぎれとぎれに聞ゆるは、里の童のすさびにやあらん、此時ゆくりなくも、足もとの草むらより、闇を燭して一の螢飛び出でぬ、手さしのべて捕らんとすれば、早くもかなたの竹叢の中に隱れ去りぬ、ほいなきまゝに立ち去りて、土橋のあたりゐ來れば、五六人の里人の、何事か語り合ひて打興せるは、螢見にやあらん、折りしもかなたより、一人の小童笹をかつぎ、片手にあまたの螢を入れし袋さげて、いといさましく驅け來り、翁の袖にすがりつきて、お爺さん、御覽じ玉へ、御覽じ給へ、と手柄がほに翁を促すも、幼な心の愛らしくぞありける、やがて月は東の山を出でて、闇の世界を破り照らしぬ、月下詩を吟じて家に歸り、やがて此の記を作りぬ。

◎落　栗

第三年級　橋本久一

幼きほどは、一年の内ゐ、秋ばかり樂しく思ひし季はあらざりき、父母ゐ伴なはれて、山ゐ茸狩せし時、始めて大なる松茸を得て、天にも昇りし心地して、喜びし事もありき、栗柿などの熟するも、此時なれば、樂しく思ひしも無理にはあらじ、おのれ幼なかりし時、友人と栗拾ひせしこと、思ひ出づるまゝ、左にしるし試みん、

秋も早やなかば過ぎぬ、山栗の實も熟しぬらんと、思ふ折柄、從兄の何某たづね來りて、明日は栗拾ひに行

かばやと云へるに、そはいとよからん、さらば明朝早く支度して、誘はんと契り置きて、其夜は早く眠につきぬ、栗拾ひなどは、他人の行かぬ間こそよけれと、まだほの暗らきに起き出で、湯漬の飯もそこ〳〵にをはりて、籠携へつゝ、急ぎ行けば、從兄ははや、門に出でゝ待ち居れり、これより共に定めし落栗も多からんなど、語らひつゝ行き〳〵山道にかゝるに、露いと繁き草の中の道となりぬ。秋の朝風身にしみていと堪へがたく、暫し憩はゞやと、落葉かき集めて、火をたかんとすれば、露に濕りて燃ねず、せんかた盡きて、また力なくとぼ〳〵と歩み行きて、漸う峰の上に迄來りし折、旭の光あざやかに、霧を破りて輝けば、俄に勢つき談笑の聲たかく歩みを進たり、樹上には、小鳥の聲さへいと樂しげに聞ゆ、急ぎ急ぎて、栗の林ゑ分入りて、そこ〳〵と探し廻れど、落栗とては、こぞの殼の朽ちのこり、二つ三つ轉がりたる外には、眠に觸るゝものもなく、互に顔見合せて、しばし茫然と佇みけり、やがて、友の云へるには、この邊は、最早他人の拾ひし跡なるべし、されば、いかほど搜すもかゝる近き山は、いつこも同じかるべければ、少しく遠き山に入らんと、我も實ゑそれこそよからめと云ひ、さらば、一息みして行くべしと、共に其處に蹲くまりて、日影を見れば、既に正午に近づきたり、こゝに両人は、餉したゝめ、さて再び山奥の方へと進み行けば、樹々の木の葉は、盡く紅葉して、燃ねたつ計りかゝやきけり、その葉の散りて、谷川の底に、堆く積りたれば、流るゝ水はさながら錦繡の如し、其林を通り過ぎ行きしに、忽ちいとよく實れる大なる、栗の林に出でぬ、ふたりは狂せんばかりに、打喜びつゝ走り行けは、落栗はさながら敷けるが如し、互に余劣らじと、拾ふ樣もいと興ありき、我は餘りに急ぎて、穗にて指を傷けぬ、されど暫くの間に、両人の籠は、栗もて滿たしつ、猶樹上にのこれるもあれば、友はましらの如く、攀ぢのぼりて、栗をゆり落し余は、枯枝など、よせ集めて火を焚きて、両人打集まり、拾ひし栗を燒き食うべて笑話などして、やがて歸途につきぬ。

◎四季の月

第三年級　野村義雄

春月、月は秋にこそよけれといひけんも、さることながら、春の月、匂へる花のひまより、さし出でたるも心地よきものなり、時雨の氣色もいつしか過ぎ、春雨の雲の一ひら、たそがれがた、春風に、つれられければ、梅、櫻は今こそと笑顔に咲き亂れたる梢より、漏れ來る月の朧げなる、たとふるに物なからむ、此の朧げなる月の、眺めにうかれ、若草茂れる庭の中を、そゞろありきし、この月を賞せしこと、しば〳〵なりき、折しも花の三片四片、そよ吹風に、散り舞ふさま、白妙の雪の如く、やがて、池ゑ舞ひ落ち、小波に、たゞよふさま、いはんやうなし、また、三五の月、青葉の白露に、やどるも、心地よきものなり、

咲く花の匂ひも深くなりぬらむおぼろにかすむ春の夜の月

夏月、　春の夜の、朧げなる月につぎて、樂しきは、夏の月になむ、あはれ、夏としいへば、暑さよて、苦しけなるやう、思ふめれど、夜の月のみは、快さものなり、茂れる木の間より　もれくる月のひかり、晝のあつさにひきかへて、涼しともすゞし、げゑ、興あるは、水の邊の月にこそ、さるに夏の月は、いつもの夕立にて、おぼろげに、霞めるが常なり、さりとて、夏の月を、もてはやさゞるも、おろかなり、こぞの夏。友ぞち二三とうちつれて、螢を、捕らむと、川邊を、すゞろありきしけるが、をちこちの蛙、少女が、調べけん琴の節おもしろく、まねけるほどゑ、ふと川中を見やれば、月は、いと涼しげに浮び、あるは、底にすむやうなる、心地よくて、ながめあかず、

夕立は跡なく晴れてわか竹にすゞしくやどる夏の夜の月

秋月、　月は秋にこそと、昔より人のいひしは、げに、さることなり、賤が蚊遣の、なびきけるすゐに、あ

るは、東の山に、空高くかゝりたる、いとゝ心地よきものなり、見るにつけて、たのしとも、かなしとも、心動かざるゝは、秋の月になむ、山の邊に、妻こふる鹿の、聲はるかなるに、月に向へるはいとものかなし、あはれ、悲さ多きは、秋の月にこそ、ある夜、仲秋の月を見しが、覺えず、なき友を、思ひ出し、かなしくて、袖も涙に乾かざるなり、夜もやう〳〵更け行きて、心ならぬゝ、久方の月、あかつきにつぎて、同じく西に、落ちける、われ、これを見て、涙いやまさりぬ、

露しげき野邊の萩原かげすみてさやけく照らす秋の夜の月

冬月、　春、夏、秋の月、いづれも、めでたけれど、たゞ、冬の月こそは、おかしくもまた、あはれふかきものなりけり、ふりつもる白がねの地、あるは、枯木の梢に、六つの花、咲きけるやう覺ゆるに、氷のごとき月影、さやかにかゞやけば、梢はみな、白妙の梅と見えて、いとをかしきものなり、月の雲より、雲に入りて、遊ぶやふなる寒さはおろか、心すら、いさましげにたのし、ある冬、とある賤が家を通り、其の主人の、羨める言を、聞きしが、われも、月を見、心はかられて、のちかなし、さはれ、賤しき人より見れば、かなしとも、貴きより、見れば、樂しとも、思はしむるものは、月にそありける、かうやうの月、いづれ、めでたからはぬあらねど、まいて、雪夜の月をや、狐、餓えを天に訴へて、さけべとも、雪は、いやが上にふり積りて解くべうもあらず、見渡すかぎり白妙の雪よ、月の光のかゞやくさま、ねもいはず、あはれにおもはゆてかくなん

かれはてし野は白妙に雪つもりさすかげ寒し冬の夜の月

◎賤ケ岳登山の記

第二年級　川瀬政七

予數日の讀書に倦み睡眠を催す頻なり、股錐螢雪の苦學を思はざるにあらずと雖も、尚禁ずる能はざるを如何せん、此ゝ於て散策洗心の念起る、偶々學友両三輩來り促すに賤岳登山の事を以てす、予欣然之を諾す、此日朝來天氣濛々たり、各輕裝して停車場に至る、時方に發車時刻に際す、急ぎ符を求めて乘車す、一聲の氣笛と共に長濱驛を辞して高月停車場に至らんとす、曉天漸く明に殘星光を失ひ、遠近の燈火明滅せり、頃刻にして高月を經、木之本ゝ達す、乃下車し道を西北に取り、行くこと半里許り、山麓に至る、更に勇を鼓して登る、坂路頗る羊腸、一歩一喘足、指痛み復歩する能はず、加ふるに微雨蕭々として降る、時に一友告げて曰く、興薄し歸途につかんと、余大喝して曰く、看ゝ山頂は目前に迫り、吾等を嘲笑するゝ似たり、苦は樂の種なるを知らずや、進め進めと軍歌を唱ひ、奮然魚串漸くにして山頂に達す、時に降雨全く止み、一天拭ふが如く雲晴れて微風徐に吹き來り、精氣浩然たり、瞰視すれば竹生島は鏡面上に珠玉を點じたる如く布帆点々宛然白鷗の両翼を張るに似たり余吾湖は水色滄々、一面青氈を布けるが如く翠松綠碧に映じて愈々青し、遠く眸を放てば峨々として殆ど青雲を摩さんとするは是れ伊吹山なり、蜿蜒として奔走し、姿態百樣造化の媚を我に呈する者の如きは是れ朝日山なり、遠近の景勝、歴々寸眸中に集まる、實に胸裡豁然積日の幽鬱を一掃せり、忽ち見る目前に一大碑の屹立せるを、賤ケ岳戰趾の碑と題す、余其碑文を讀み、懷舊の念勃々たり、嗚呼當年聲鼓萬馬の悲聲、夫れはた如何凄々たりしが、必ずや天動き地震ひ、數多の將士此處の露と消えしもの多かりしならん、中川清兵衞清秀も秀吉の爲に奮戰勇鬪、終に此所に仆れにき、中に僅かに一碑蘚苔蒼々として存するのみなり、嗚呼今は一片の香を供ふるのみなく、只朝夕其靈を慰るは草間ゝ啾々たる蟋蟀と、樹間ゝ嚶々たる黄鳥のみ、是を思へば扼腕感慨の念に堪へず、然れども其赫々たる芳名は天地と共に朽ちさらむとす、清秀亦地下に瞑するを得む、時に一友下山を促すこと頻なり、顧れば夕陽西に傾き、

晩鴉啞々として塒に歸らむとす、乃ち急ぎ山を下り、月を蹈むで長濱に歸る、歸途熟ら考ふるに此戰趾や大に人心を感激せしむるものあり、又其景色は琵琶湖を一眸中に收めて、大に浩然の氣を養はしむ、諸子もし慷慨至剛之精神、及び浩然の氣を養はむと欲せば、須からく佳景舊蹟ある此古戰場を探れ、余は讀書の暇ある毎に、此山に登り以て英氣を養はむと欲するものなり。

◎秋の散歩

第二年級　白井敬治郎

一日、遊意勃然として動き、一室よ蟄居するに堪へず、孤杖短褐、飄々乎として、柴門を出づ、門を出づれば万頃の田野なり、時秋の半なれば、四方の連山は悉く錦繡に飾られ、金風颯々として、衣袂を飜し、其爽快云ふ可からず、路に沿へる小川の邊り、數百千の尾花は、風に靡きて我を招けり、田圃の間、早稲、中稲は夙く苅り取られ、今や、晩稲の苅入の眞盛りなり、節面白く歌ひつゝ、稲うつ男、裾高く揭げて稲苅る乙女、あるは子守の土瓶提けて、泣く兒ゆりつゝ行く有樣など、一として面白からぬはなし、かゝる間を折れつ、曲りつ行く程に、道漸く狹くなる所に、偶々牛追ひ來るに出遇ひぬ、我より道を避くれば、彼は丁寧に笠取りて、御邪魔したりと云ふ、げに愛すべき風情なりけり、折りしも又三々五々里人の歸るに遇ふ、孰れも皆喜色の面に現はれたるは、今年の豊作を喜ぶにやあらん、かく足に任せて行く程に路傍の柿の木、葉半ば散り果てゝ色赤みたる柿の數十百實れる最も美し、やがて某山の麓に到る、仰ぎ見れば滿山紅葉に彩られ、所々よ常盤木の交はれるなど、恰も錦繡を展べたらん如く、如何に深山の景の美しさかを想像せしむ、更に歩を進めて羊腸たる山坂に登れば、想ふに優りし絶景にて有りき、二ヶ月前に來りし時、綠葉鬱々として、露滴らん樣なりし、万樹の今は一面よ色付き、黄色なるもの、眞紅なるもの、樺色なる物、淡紅の物、此等種々の樹木參差錯綜せり、殊に紅葉は昨日の雨に洗はれて、紅一層深し、かくて此の際一入美しく感せしは、今しも樵夫が晝食の湯を沸すにやあらん、白く長く斜に紅葉を掠めたる煙の揚れるさま、得も云はれずおかしかりき、噫小杜をして之を視せしめんか、正に車を停むること半日なるべし、愈登るに忽ち見る、林間に水色清く瑠璃の如き一大池あるを、余覺ゑず快と呼ひ急歩して池邊に至れば、風に靡きたる尾花、野菊、女郎花は秋の深さを告げ顏に、萩は處狹き迄でに繁り合ひて、燃ゆるが如き木々の紅葉は峰吹く風に誘はれて、ひら〳〵と落ち來るさま、覺ゑず余をして、快哉を三呼せしめたり、嗚呼この幽境こそ秋を罩めたる自然の畫圖と云ふべけれ、日暮愛を割きて家に歸り、やがて此記を作る。

◎若州高濱浦

第二年級　鴻池萬藏

今茲八月、輕裝徒歩橋立の勝を探らんとし、路を若狹の海岸に取る、某日大飯郡高濱村に達す。此の地元木下氏貳万石の城邑にして、北面日本海よ臨みたるところ、之を高濱浦と呼び、地甚だ海水浴に適す。余同人等と共に直ちに衣を解き海に投ず。波靜にして水清く、白砂布くところ眼界遙かに、青松連なるところ風塵起らず。奇巖怪石波上に躍り、島嶼點々海面に浮ぶ、其大なるものを高島と稱し、鬱紆たる茂林その全部を蔽ひ、翠綠滴らんと欲す。余覺ゑず叫んで曰く、嗚呼小江の島かなと、是れ其形勝の相似たるを以てなり、惜むらくば、此地空しく僻陬に隱るゝを、噫人も亦豈に之に類するものなきを得んや。夕風涼しき頃浴を了り、渚邊を逍遙して、感慨すること良久し。